

# 眼病関与タンパク質特定

## 「BCL6B」治療薬開発へ成果

### 岐阜薬科大研究班

岐阜薬科大の中村信介准教授らの研究グループが、「BCL6B」というタンパク質が目の血管の病気に関与していることを突き止めた。目の中にある血管から漏れ出した液体が物を見るのに重要な部位の黄斑にたまり、視力が低下する滲出型加齢黄斑変性、網膜静脈閉塞症に効果がある新たな治療薬の開発につながる成果が得られたという。研究成果をまとめた論文が、米国の学術雑誌に掲載された。

(山本貴史)



中村信介准教授

中村准教授によると、「V EGF」といわれるタンパク質の過剰な増加が、血管がもろくなったり、異常な血管が新たに生まれる要因になっていることが分かっている。VEGFが増加すると、BCL6Bも増えてい

血管安定作用がある「Notchシグナル」が不活性化すると言われているが、目の血管異常に関してBCL6Bが関係しているかどうかなどは明らかになっていなかった。

こうした背景を受け、同大のほか、愛媛大、千葉大、創薬事業を手がけるカルナバイオサイエンス(神戸市)でつくるグループは、BCL6Bに着目した研究に着

手。5年ほどにわたり、マウスやカニクイザルを使った実験やデータ分析などを進めた。

今回の研究では、目の中でも、血液の流れが滞っている血管や新たに生まれた異常な血管の部位でBCL6Bが強く発現することが分かった。また、BCL6Bの発現量を抑える物質「BCL6B siRNA」を投与すると、病的な血管

の異変が抑制される結果も得られたという。

実験方法の提案やデータの解析などに携わった中村准教授は「学術雑誌の6月号の表紙を飾るほどの研究

になった」と成果を強調。

「目の中でのBCL6Bの生理作用が明確になり、BCL6Bを選択的に抑える治療薬の開発につながる」と語った。